

「国際協力研修」からの学び

— 地球市民を育むフィールド教育海外プログラム —

向井 一郎

キーワード：フィールド教育、国際協力研修、よき市民、気づき・学び、多様性の理解、もやもや

概要

桜美林大学基盤教育院フィールド教育科目として実施されている国際協力研修のうち、フィリピン、バングラデシュ、インドの3プログラムをふり返る。

研修は、知識の習得よりもむしろ学生自身が自らの五感を使って見たこと・聴いたこと・感じたことを、既存の固定概念にとらわれず、信じ、素直に受け止めることに重きを置いている。

事前学習、現地研修、事後学習などを通じ、学生たちは異なる文化・価値観を理解し、他者への偏見をなくし、さまざまな事象への自分自身のかかわりに気づき、考え、行動する力を引き出していく。

2011年度2012年度の実践事例から、学生たちの気づきと学びを紹介すると同時に、本研修の持つ可能性を考察する。

はじめに

桜美林大学基盤教育院フィールド教育科目海外プログラムとして、国際協力研修が実施されている。国際協力研修は、「アメリカ貧困問題」、「インド国際協力」、「バングラデシュ国際協力」、「フィリピン国際協力」の4プログラムで構成されている。

本稿では、筆者が担当しているインド・バングラデシュ・フィリピンの3プログラムについて、2011・2012年度の実施状況をふり返りこれらの、国際協力研修の課題と今後の可能性について考察する。

1. 国際協力研修が目指すもの

国際協力研修（フィリピン国際協力研修）、国際協力研修（インド国際協力研修）、国際協力研修（バングラデシュ国際協力研修）、の3プログラムは、以下に示す共通の到達目標を持っている。

1. 講義や書籍・映像などを通じて知識として知っている「開発途上国」の現状や抱える課題について、現地へ赴き、自らの五感を使って新たに感じ・気づき・考える。
2. 現場で開発を取り巻くさまざまな人々に出会い・話し、また自ら現場を体験することにより、「国際協力」や「開発」を取り巻く現状・諸問題に気づき・考える。
3. 現場研修を通じ、「開発途上国」の現状や課題を、日本に住む「わたし」が、遠い国の他人事ではなく、同じ地球に暮らす一人ひとりとして「自分事」として捉える視点を養う。
4. その上で、「わたし」が、「開発途上国」に暮らす人々と、これからどのように関わっていけばよいのかについて考え、行動するきっかけをつかむ。（シラバスより）

国際協力研修という科目名から、本研修の最も重要な目的は国際協力の現状と実務についての知識を得ることであると理解されるかもしれない。もちろん、フィリピン、インド、バングラデシュの各プログラムには、それぞれの訪問地に応じた研修のテーマがある。

しかし、この研修を通じて目指すものは、一人ひとりの学生が責任あるよき地球市民として成長するためのきっかけをつかむことにある。このため、異なる文化・価値観を理解し、他者への偏見をなくし、さまざまな事象への自分自身のかかわりに気づき、考え、行動する力を学生自身から引き出すことを重視している。

このような考え方の下に実施した2011・2012年度の国際協力研修プログラムから、フィリピン、バングラデシュの現地研修での学び・気づきや帰国後の学生たちの変化について考察した。

2. 事前学習を通じた気付き・学び

国際協力研修を履修する学生たちは、現地研修に先立ち、1泊2日の合宿を含め11～12講時相当の事前学習を受ける。事前学習の目的は、現地研修での学びを最大化することにあり、以下の5つの目的で行われる。

- 1) 学生が持つ国際協力や開発に対する固定概念を崩し、多様な視点・考え方があり、また自分自身の感じたことを自分自身で受入れてよいことに気づく。
- 2) 訪問国の状況や、特にプログラムに関連の深い開発課題に関する基礎知識を得る。
- 3) 世の中で起こっているさまざまな事象が、何らかの形で自分につながっていることに気づく。
- 4) 参加学生同士のチーム・ビルディングを通じた自己開示を促進する。
- 5) 海外での研修に当たり必要な安全管理上の知識を身につける。

事前学習は担当教員と参加学生の関係構築の場であり、本研修では、教員と学生の双方向の学びが促される関係作りを大切にしている。

このため、できる限り参加型学習手法による事前学習を行っている。

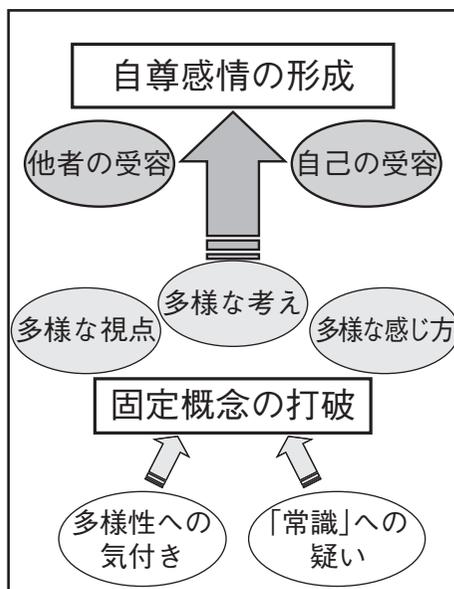
すべてのプログラムに共通して初回に行っている学習は、開発についての固定概念を崩すためのワークショップである。48枚のさまざまな写真を使用し、フォトランゲージ・アクティビティを行う。フォトランゲージとは、写真を観察し深く理解することにより、学習者の気付きや学びを促す手法である。学生たちは、「開発」という語にはさまざまな解釈があり、また人によって全く違ったイメージを持っていることに改めて気がつく。

ここで最も重要なことは、「開発」の解釈の仕方やイメージに「正解」はないことに気がつくことである。これまで、「正解のある」学習に慣れてきた学生たちは、一人ひとりが違った解釈や受け止めをしても間違いではないことに改めて気がつく。

このワークショップを通じ、学生たちは、今まで自分が「常識」と思い疑ってもみななかったものを疑い、これから学ぶ事象を一人ひとりが自分なりに解釈をしても「間違い」ではないことに気づいていく。

これまでの固定概念を疑うことで、学生たちには、これまで、見えていたけれども見ていなかっ

図1. 事前学習を通じた学生の
自尊感情の形成の概念図



た、またきいていたけれども聴こえなかった、あるいはこれまで感じるこののできなかったものに気づく素地ができる。そして、その気づきを自分なりの言葉で、間違った答えをいうことを恐れずに表現してもよいという気持ちになることである。これらの気づきは、さまざまな事象を多様な視点で受け止め、感じ、考えることもあり得ること、つまり他者の価値観を理解し受容する第一歩となっていく。さらには、多様性の理解や他者への受容が、固定概念にとらわれずに自らの感覚を信じて意見を持つことを促す。このことは、学生自身の自尊感情を高めることにつながっていく。

またこの他、事前学習ではさまざまな事象の自分とのつながりへの気づきを重視している。このため、携帯電話やパーム油など身近なモノをテーマとしワークショップも行っている。学生たちには、一見、自分とは関係ないと思えるような世界の別の場所で起きている困った事象が、実は自分にとっても身近なモノを通じてつながっていることに気づく。

加えて、フィリピン研修のみは、現地で旧日本軍や当時の日本政府の作った傀儡政権の残したさまざまな爪あとに出会うこともあり、フィリピンの元日本軍従軍慰安婦の方の証言をもとにしたワークショップを行う。学生たちは、学校教育では取り扱わない日本の加害を初めて知り衝撃を受ける。しかし、学生たちには、その加害の事実を萎縮するのではなく、過去に何が起こったのかをしっかりと理解しなければ、きちんとした未来の関係を築くことができないことを理解させるようにしている。

こうして、参加型学習手法を基本とした事前学習を通じて、学生たちは、現地研修でしっかりと感じたものを受け止め、さまざまなことに気づき・考えるための準備を整えていく。

3. フィリピン研修での気づき・学び

3.1 フィリピン研修の概要

フィリピンの現地研修は夏休みに3週間行われ、前半10日間をマニラおよびその近郊での都市研修、後半を地方での研修にあてている。

桜美林大学の提携大学であるアテネオ・デ・マニラ大学は、自学の学生に1学年から4学年までを通じ段階的に社会参加プログラムを提供している。本研修の都市研修は、アテネオ・デ・マニラ大学の社会参加プログラムから入門的な部分を約10日間に短縮し、都市に暮らす貧困状況に置かれている人々の状況を理解することを主な目的として実施している。

都市研修で学生は、焼却されずに廃棄されるゴミが「ごみ山」となっているパヤタス地区で暮らす人々への生計向上支援、住居建設支援、教育支援などのプログラムを経験する。また、マニラ市内でストリートチルドレンや路上生活を送る家族やその支援者たちと出会う。

ただし、国際協力研修は、「本研修が目指すもの」の項で述べたように、自らの労働奉仕で何かを成し遂げることも、自らの五感を使って新たに感じ・気づき・考えることを重視している。このため、たとえば住居建設をボランティアとして手伝うものの、それはあくまで、住居を建設するコミュニティの人々の気持ちに近づくことや、支援者の気持ちを体感することが目的である。

地方研修は、フィリピンでも最大規模の NGO の一つである PRRM（フィリピン農村復興運動）のコーディネーションで行う。2011 年はバタアン州を 2012 年度はヌエバ・ビスカヤ州及びイフガオ州を訪問した。

訪問場所は違っていても、環境と開発の両立、少数先住民族と開発、旧日本軍の引き起こした行為などを知ることを共通の研修テーマとしている。

3.2 2011 年度研修での気づき・学び

2011 年度は 1 年生から 4 年生までの 23 名の学生が参加した。都市研修で非常に厳しい状況に置かれている人々の様子にふれた後、マニラ湾に面したバタアン州を訪れた。バタアン州では、沿岸資源管理を行いながら持続可能な開発を行っている漁村に 5 日間、ホームステイした。

3.2.1 「貧困」とは何だろう

学生たちは、都市で厳しい生活を送る人々は、地方で生活を維持することができず、職を求めて都市に流れてきたとの話を聞かされていた。このため、バタアン州では相当に厳しい貧困状況を予期していた。しかし、ホームステイ先では、たとえば冷蔵庫や洗濯機あるいは温水の出るシャワーといった便利な生活こそ送っていないものの、家族や近所との人のつながりが濃密で、笑顔の絶えない村の様子に「貧困とはなんだろう。」という疑問を持ち始める。

ある学生は、前半の都市研修から「物質的にも精神的にも満足できない。」状態が貧困ではないかと感じるが、地方研修で、物質面や環境面で欠けているものが多いにもかかわらず「毎日が幸せ。」と答える人々に大いに混乱する。

この学生は、続く春休みにバングラデシュ研修に参加し、さらにこの答えを探そうとする。バングラデシュでの気づきや学びは後に述べる。

3.2.2 先住少数民族をめぐる問題

また、バタアン州の山中で暮らす少数先住民族であるアエタ族の村を訪問した際にも、別の気づきがあった。学生たちは、アエタ族の村に入る前に、アエタ族居住区を含むバラングアイ（フィリピンの最小の行政単位）の長から「アエタ族は町に出てくるのを怖がり、

居住区からめったに出てこない。」との説明を受けた。

さらに、アエタ族の村では、村のすぐ近くにゴミ山が作られていることや、村にはごく最近まで電気が通っていなかったことを知る。

アエタの人々に出会った後、学生たちはホームステイのホストファミリーに、アエタ族訪問の経験を伝えようとするが、多くのホストファミリーは、アエタ族のことをほとんど知らないことに気がついた。

学生たちは、もともとそこに住んでいた人たちが、なぜ後からやってきた町の人たちを怖がるのか。また、町の人たちはどうしてアエタ族のことをほとんど知らないのか。このことに大きな疑問を感じる。一部の学生は、帰国後、少数民族の問題に興味を持ち、日本のアイヌ民族の迫害や同化の歴史を研究してレポートにまとめた者もいる。

3.3 2012年度研修での気づき・学び

2012年度は、1年生から3年生の13名が参加した。昨年同様の都市研修の後、北部山岳地帯にあるヌエバ・ビスカヤ州及び世界遺産の棚田で有名なイフガオ州を訪問した。

3.3.1 ボランティアとは？

2012年度の都市研修で、何よりも大きな学びをもたらしたのは、たまたまマニラで発生していた洪水被害への支援を行う、アテネオ大学の学生の活動に参加した経験であった。

この洪水支援活動は、アテネオ大学の構内で外部からの飲料水や衣類などの支援物資を受け付け、各地のニーズに応じて仕分けし、支援先への配送のためトラックに積み込むものであった。受付けた物資をトラックに積み込む際に、台車などを利用すれば効率的に作業が進むにもかかわらず、大勢のアテネオ大学生がバケツリレー方式で物資を手送っていく。学生たちもこのリレーに参加したが、なぜわざわざ非効率なバケツリレー方式で行うのか、不思議に感じた者もいた。

また、活動場所では学生バンドが演奏し、一部の学生は歌ったり踊ったりしていた。日本であれば、このような場面では「不謹慎だ。」と問題になりかねないような行動だが、みな楽しそうにしている。

これらの経験から、フィリピンでは、ボランティア活動や他者を支援することは、崇高で自己犠牲を念頭に行うものではなく、参加を希望する誰もが参加し、何かの活動を担うことができ、また、参加している誰もが楽しく参加することが重要であるとの気づきを得ることができた。この気づきは、「人」を大切にすることを第一に考える視点を学生たちに提供した。

3.3.2 「ライフ・スキル」とあるべき開発の姿

学生たちは、ゴミ山のあるパヤタス B 地区で活動する、日本の NGO ソルト・パヤタスを訪問した際に、その地区で暮らす人々に「ライフ・スキル」の実践を促しているという話を聞いた。

この「ライフ・スキル」は、個人が自らの課題に気づき、その課題を解決するために実行するためのプロセスである。図2に示すように、このプロセスは参加型開発の参加のプロセスに酷似している。学生たちは、ソルト・パヤタスの奨学生のリーダーから説明を受けた「ライフ・スキル」をよく理解し、その後の研修において、参加型開発に通じる気付きを得ることができた。

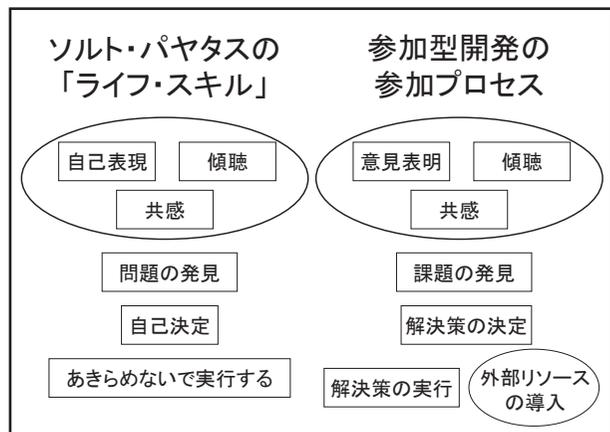
特にヌエバ・ビスカヤ州で、オーストラリアの企業による金山開発にゆれる村を訪問した際に、「ライフ・スキル」への理解が参加型開発への理解がを深めていることが実感できた。

村は、金山開発に賛成する人々と反対する人々に二分されており、われわれは、反対派に受け入れられ、ホームステイを含めて1泊2日の滞在をした。村から PRRM の研修センターに戻った際に、学生たちに「もし、予算に制限なくあの村で活動するとして、君たちは村に戻って一番初めに何をするか考えてみよう。」と発問した。

ほとんどの学生が「今回は反対派の人々にしか会っていないので、まず賛成派の人々の意見を聞きたい。」と答えた。筆者は、多くの学生が、金山開発反対運動をどのように進めるのか検討すると答えるのではないかと予期していた。しかし、学生たちは「ライフ・スキル」への理解から、村の問題を解決するのは村人であるべきで、外部者のわれわれは、まずは村人の話を傾聴すべきだと考えた。

このことから、学生たちが自ら見聞きしたことをしっかり受け止めることにより、自然に、開発のあるべき姿に迫っていることがうかがい知れる。

図2 「ライフ・スキル」と参加型開発における参加プロセスの類似性



4. バングラデシュ研修での気付き・学び

4.1 バングラデシュ研修の概要

バングラデシュの現地研修は春休みに2週間行われ、世界最大のNGOであるBRAC（バングラデシュ農村向上委員会）を主たる受け入れ先として、BRACの実施するマイクロ・ファイナンスを中心とした村落開発プロジェクトを学んだ。また、同時に、日本のNGOであるシャプラニールが現地NGOと連携して行う村落開発事業や日本のODA事業で支援しているバングラデシュ政府農村開発公社の行う村落開発事業などを学び、比較する。

マイクロ・ファイナンスは、民間の金融機関にアクセスできない貧困層を対象に小規模な融資を行い、収入向上のための経済活動を促す事業である。2006年にノーベル平和賞を受けたMuhammad Yunus氏が設立したGrameen銀行などが有名である。

4.2 バングラデシュ研修での気付き・学び

バングラデシュ研修には、1年生から3年生の17名が参加し、このうち約半数の8名が2011年度フィリピン研修からのリピーターであった。

4.2.1 援助の理想と現実

BRACのコーディネートした研修プログラムを通じて学生たちは、世界的に確立した援助手法とされているマイクロ・ファイナンス事業の対象とさえならないような、最貧層というべき、貧困層の中でさらに困っている人々がいることに気がついた。

最貧層の人々は、たとえばBRACの「ウルトラ・プアー・プロジェクト」（最貧層支援プロジェクト）などでマイクロ・ファイナンスにアクセスできるだけの最低限の経済力をつけていく。しかし、そのようなプロジェクトで救済されているのは最貧層のごく一部に過ぎず、多くの人々がマイクロ・ファイナンスにもアクセスできず、周りの人々が経済的に豊かになっていく一方で、BRACをはじめとする援助の主流から取り残されている。

学生たちはこのような現状に気づく一方で、自分たちが最も助けるべきだと感じるのは最貧層の人々であるという矛盾に疑問を感じる。

学生たちは、なぜこのような現実があるのかくり返し討論し、援助する側の立場から、援助する側の団体の経営を考えると、ある程度成果の上がる事業に絞り込んで行う必要があるのではないかと考えた。団体の経営が立ち行かなくなれば、マイクロ・ファイナンスで収入向上のできるはずであった多くの人たちが救済されないまま終わってしまう。バングラデシュ全体のことを考えた場合、より多くの貧困層の生活向上のために、少数の最貧層を切り捨てるのは止むを得ないのではないかという考えである。

とはいえ、学生たちには、やはり最も支援を必要としているのは、最も弱い立場にある

最貧層の人々であるとの認識もあり、理想と現実のギャップに悩み続ける。

4.2.2 最低限の生活とは

現地研修に出発する前に、われわれは現地での行動ルールの一つとして、現地で物乞いに遭った場合にどう対応するかを話し合い、物乞いにはお金を渡さないことにしていた。学生たちにはそれぞれその決定をした理由があったと思われるが、こちらからはわざとその理由を話し合わずにルールを決めた。

研修場所への移動の途上、ガソリンスタンドなどへ立ち寄る度に車に物乞いの人々がやってくる。そのような場合には、学生たちは車の中で、物乞いの人々が去るのを待つしかなく、ルールを決めたもののどうしたらよいのかと悩んでいた。

あるとき学生たちは、お金をもらうことをあきらめた物乞いが、車から離れたところで、地元の人と談笑しているのを目撃する。学生たちは、その物乞いは、実は物乞いをしなくても生活をしていける。だから、お金をもらえなくても笑っていられるのではないかと考えた。

しかし、学生たちに「お金に困っている人は笑うことも許されないのか？」と発問したところ、人間は笑う場面もないと生きていけないのではという議論になった。後述するが、この議論から日本の野宿生活者や生活保護受給者の状況に興味を持ち、帰国後にさまざまな形で関わっているものもある。

同時に、村でのある体験が話題になった。それは、BRACの最貧層支援プロジェクトのサイトを見学した際に、最貧層の人に、村の人が家を建ててあげたというものであった。村の家々は、その収入に見合った材料で建てられている。屋根もトタンが標準的であるが、収入の低い家は藁ぶきになる。最貧層の家は、やはり最低の建材で建てられていたようであったが、自分で家を建てる場合には、それぞれの収入の肩幅にあった材料を使うのが当たり前としても、最貧層を支援する場合には、何を基準として材料を選ぶのかという話題である。

このような議論から、支援する側にとって「最低限をめぐむ。」ということはどう解釈すればよいのか、また支援を受ける側からは「最低限の生活が立ち行く。」ためにはどのような支援を受けたいと思うのかという議論が起こった。

5. 帰国後の学生たち

国際協力研修では4～5講時程度の事後学習を行う。事後学習は、現地研修での学びをふりかえることを基本としている。プログラムを追いながら、各プログラムを3つのキー

ワードでふり返っていく。

学生たちは、そこで見た事実よりはむしろ、その日その日に感じたこと、疑問に思ったことをキーワードとして出していく。事後学習は最後に、これから自分が学びたいこと、調べたいことや取り組みたいことを各自が考え、書き出すことで研修のまとめとする。

5.1 自主研究の履修

研修終了後、多くの学生が何らかの形で国内外の開発をめぐる問題に関わっていく。大学の科目として、国際協力研修からの気付きや疑問をさらに深める「自主研究」の履修が用意されている。

自主研究を履修した学生たちは、たとえば、現地の若者たちと日本の若者たちの服飾産業を通じた関係を考えた者や、現地の教育の状況についてさらに詳しく調べた者がいる一方で、旧日本軍の加害について調べ、それらがなぜ学校で教えられないのか考察する者や、日本国内の少数民族について調べた者などがいた。

このような自主研究を履修した学生たちは、国際協力や援助手法そのものに興味が特化しているのではなく、むしろ多くが、日本に暮らす学生たちと開発途上国との関係や、現地研修で見たものと同様の日本国内の問題をテーマとしている。

これらのテーマの選択は、学生たちから、開発を巡るさまざまな課題と自分とのつながりに気づき、自分たちの足元にある問題に気づき関わろうとしている姿勢を引き出すことができたことを示している。

5.2 バングラデシュ研修からのワークショップ

2011年度バングラデシュ研修に参加した学生たちのうち5名は、2012年度春学期期間に開発教育的視点で国際協力を考える自主ゼミを行った。この自主ゼミを通じ、彼らは、バングラデシュ研修での気付きを共有するためのワークショップを企画し、2012年8月4日に特定非営利活動法人開発教育協会が主催する「開発教育全国研究集会」で発表した。

ワークショップは、大きく2部構成で、バングラデシュの物乞いの人たちと日本の野宿者の人たちをつなぐ内容になっている。

ワークショップの前半は、現地研修での気付きや学びのうち、物乞いの人たちへの様子や対応について扱っている。現地へ出発する前だと想定としてワークショップ参加者に、物乞いへの対応のルールをあらかじめ話し合ってもらう。その上で、現地に行ってみると、現地コーディネータのBRACスタッフや、協力隊員である大学の先輩から、気が向けば物乞いの人にはお金を渡すようにしているという話を聞いたことを披露する。その上で、もう一度物乞いの人にお金を渡すかどうかを話し合ってもらう。ここで、ワークショップ参加者の多くが、お金を渡すかどうかは自分自身の気持ちの問題であることに気がつく。

この後、ワークショップは日本に帰国した後との設定になり、帰国後日本でも同様の問題がないか気になり、野宿者について調べてみたことがテーマとなる。

インターネットなどで野宿者や生活保護受給者の自己責任論が展開されていることを紹介する一方で、帰国後、実際に山谷で野宿者支援に関わっている学生から、実際に野宿者の人たちと話したことが披露される。野宿者たちは決して怠けているので野宿状態になったわけではなく、できるだけ他人に迷惑をかけずに、一所懸命に働いているが野宿状態から抜け出せない。

ワークショップは、ここで、遠いバングラデシュの物乞いの人には同情を感じるのに、日本の身近な野宿者のことには無関心だったり冷淡であったりするのかという問題意識を投げかけて、終了する。

ワークショップには、日本有数のNGOの事務局長や、神奈川県に本拠を持ち、弱められた人々に寄り添うことを大切にしているNGOの理事長が参加していた。彼らからは、「自分たちが初めてスタディ・ツアーに参加したときのことを思い出した。」「学生たちの気付きや疑問が非常によくわかり、とてもよかった。」などの感想がよせられた。

6. 国際協力研修(フィリピン、バングラデシュ、インド)の課題と今後の可能性

学生たちが固定概念を崩し、自らの五感に素直になって新しい概念を形成していくことは、学生がよき市民として成長する上で非常に重要なことである。

学生のみならずわれわれは、身近な少し違うものの違いを受入れることが難しい。違いがあまりに身近すぎたり小さすぎたりして、受入れるよりはむしろ排除しようとする。このような状況下では、固定概念を崩し多様性を認めることは非常に難しい。

しかし、一方で、大きく違うものはむしろ受け入れやすい。国際協力研修で訪れる開発途上国やアメリカの貧困の状況は、学生たちにとって日常から大きくかけ離れたものであろう。それだけに、学生たちが、素直に多様性を受容するよう心が開かれていくと思われる。

本稿では紙幅の制限上扱うことができなかったが、インド研修でも同様の気付きや学びが見られた。

筆者の担当する国際協力研修の、事前学習から現地研修を経て事後学習にいたるプロセスは、参加型開発教育ワークショップのアイスブレイク→アクティビティ→ふりかえりのプロセスとほぼ同じであることに気がついた。つまり、国際協力研修そのものが、半年以上をかけて行う巨大な参加型開発教育ワークショップであるともいえる。

開発教育の課題の一つは、ワークショップの「場」ではファシリテーターが提供する教材などをもとに、参加者同士が、気付きや学びに基づく考えを自由闊達に意見交換する。

しかし、ワークショップが終了すると「場」の雰囲気が変われ、参加者は日常生活に戻った後、ワークショップでの気付きや学びを行動に移していくことは難しい。

本稿で紹介した学生たちの気付きや学びの経験からわかるように、本研修で、学生たちは確たる「正解」を見出すことはない。彼らが研修で得たものは、固定概念を疑い、他者を認めながら、さまざまな角度から見、考える習慣であるといえる。学生たちは、研修で発見した多様な疑問の答えを常に考え続け、「もやもや」しながら研修を終える。

この「もやもや」感が、次のステップである行動を促す大きな原動力となる。現実には少なからぬ人数の学生たちが、帰国後、それぞれに野宿者支援、地域の福祉への参加や被災地支援などの具体的な行動を起こし、さらにそこからの疑問にもやもやし、考え続けている。

しかし残念ながら一方で、開発教育ワークショップの参加者同様、多くの学生たちは事後学習を終え、日常に追われる中で、行動へのきっかけを失っていく。

学生たちが国際協力研修でつかんだ習慣を行動へと移すきっかけを、大学の学びの中にどうつなぐのかが今後の課題と考えられる。

今後は、帰国後の学生たちをより積極的にサービス・ラーニング・センターの活動と結びつけることや、基盤教育院地域社会参加科目をはじめとするサービス・ラーニング科目への参加を促すなど、国際協力研修での気付きや学びが、学生自身の行動へとつながっていくような学内のさまざまな教科や課外活動との有機的な連携を模索したい。